

1534 年 2 月下ライン地方における宗教改革思想・再洗礼主義の伝播 —ヤコブ・フォン・オッセンブルクによるミュンスター再洗礼派の宣教分析を通じて—

永本 哲也

1. はじめに

1.1. 本稿の課題

1517 年にヴィッテンベルク大学の教授マルティン・ルターが、カトリック教会の贖宥状販売を厳しく批判した『95 箇条の提題』を公表したことが契機となり、宗教改革は、急速にヨーロッパ各地に広がっていった。震源地は、ドイツのザクセン選帝候領の都市ヴィッテンベルクであったが、1520 年代にドイツやスイス諸都市で次々と宗教改革が導入された。1525 年には宗教改革思想に大きな影響を受けた農民戦争、あるいは「平民の革命」が中部や南部ドイツを席卷し¹、1530 年代に入ると北ドイツの諸都市でも宗教改革運動が多くの都市住民を突き動かした²。

このように宗教改革は、わずか 10 ～ 20 年の間に、ドイツやスイス、さらにはその周辺の諸国と言った広い範囲に、急速に広がっていった社会運動であった。宗教改革がこれほど急激に広まった理由として注目されてきた媒体が、印刷物である。15 世紀半ばに活版印刷術が確立されると、手書きで書写して作られた伝統的な写本と比べると、安価かつ大量に書物を複製することが可能になった。16 世紀に入ると、生産される印刷物の量や種類が格段に増加していったが、そのきっかけとなったのが宗教改革であった。宗教改革の中心人物であったルターの著作は、1500 年から 1540 年までの間に出版されたドイツの書籍全体の 3 分の 1 を占めていた³。ベルント・メラーは、印刷された書籍、そして書籍の出版が行われた都市が、宗教改革思想の伝播にとって果たした役割の大きさを端的に示すために、「書籍印刷なくして、宗教改革なし」と述べている⁴。

¹ ベーター・ブリックレ著、前間良爾、田中真造訳『1525 年の革命 ドイツ農民戦争の社会構造史的研究』刀水書房、1988 年；野々瀬浩司『ドイツ農民戦争と宗教改革 近世スイス史の一断面』慶應義塾大学出版、2000 年。

² 倉塚平「ミュンスター千年王国前史 (3)」(『政経論叢』明治大学政治経済研究所紀要 47 巻 5/6 号、1979 年、39-54 頁)。

³ R. エンゲルジング著、中川勇治訳『文盲と読書の社会史』思索社、1985 年、60 頁；Engelsing, Rolf, *Analphabetentum und Lektür. Zur Sozialgeschichte des Lebens in Deutschland zwischen feudaler und industrieller Gesellschaft*, Stuttgart 1973, S. 28.

⁴ Moeller, Bernd, *Stadt und Buch. Bemerkungen zur Struktur der reformatorischen Bewegung in Deutschland*, in: Mommsen, J. (Hg.), *Stadtbürgertum und Adel in der Reformation. Studien zur Sozialgeschichte der Reformation in England und Deutschland*, Stuttgart 1979, S. 30.

文字のみで書かれた書籍以外に、図像が含まれたパンフレットや一枚刷りのビラに注目したのが、ロバート・W・スクリブナーである。彼は、識字率が低かった当時の社会では、宗教改革のメッセージを伝えるのに、木版画による図像が果たした役割が大きく、図像と文字が両方入った小冊子やビラが、民衆に宗教改革のメッセージを伝える際に大きな影響力を及ぼしたと考えた⁵。

しかし、スクリブナーは、宗教改革思想の拡大について理解するためには、印刷物だけでなく、民衆の祝祭や口頭でのコミュニケーションなど、当時の人々が用いていた全てのメディアを考慮に入れる必要があると見なし、口頭でのコミュニケーションによる伝播の重要性も強調している⁶。

スクリブナーが指摘するように、文字を読める人が限られていた時代において、説教や家族・隣人・友人間での会話などの口頭でのコミュニケーションが、宗教改革思想の伝播において、極めて重要な手段であったことは容易に想像できる。そのため、宗教改革思想の伝播の経路や速度、そこで用いられた手段を体系的に理解するためには、印刷物のみならず、口頭でのコミュニケーションが、宗教改革思想の伝播において果たした役割を明らかにする必要がある。にもかかわらず、宗教改革思想の伝播に関する研究は、印刷物の影響に注目するばかりであり、口頭でのコミュニケーションに注目した研究は極めて乏しいのが現状である⁷。このような研究状況の中では、先ず個別の事例を扱った実証研究を地道に積み重ねていくことが必要になるであろう。

1.2. 下ライン地方での再洗礼主義の伝播

以上の研究状況に基づき、本稿では、1534年2月の下ライン地方において、印刷物のみならず口頭でのコミュニケーションを用いた宣教によって、宗教改革思想がいかに伝播していったかの検証を行う。この時期の下ライン地方の宗教改革は、ルターやメランヒトンといったヴィッテンベルクの改革者、ツヴィングリなどのチューリヒの改革者、またはブツァーのようなシュトラ

⁵ Scribner, R. W., *For the Sake of Simple Folk. Popular propaganda for the German reformation*, Oxford 1981. 日本でも、宗教改革期における木版画を用いたプロパガンダに関する以下のような研究が存在する。森田安一『ルターの首引き猫 木版画で読む宗教改革』山川出版、1993年；芹澤円「宗教改革期の印刷ビラにみる説得的効果 ―民衆の心をつかむレトリック―」（『学習院大学ドイツ文学会研究論集』15、2011年、1-27頁）。

⁶ Scribner, R. W., *Oral Culture and the Diffusion of Reformation Ideas*, in: Scribner, R. W., *Popular Culture and Popular Movements in Reformation Germany*, London and Ronceverte 1987, p. 50. (*History of European Ideas* 5, 1984).

⁷ 口頭でのコミュニケーションによる宗教改革思想の伝播を扱った数少ない実証研究としては、南ドイツにおける説教師などによる宗教改革思想の伝播を扱った Hannemann, Manfred, *The Diffusion of the Reformation in southwestern Germany, 1518-1534*, Chicago 1975 やエルザス地方の農村を扱った Conrad, Franziska, *Reformation in der bauerlichen Gesellschaft. Zur Rezeption reformatorischer Theologie im Elsass*, Stuttgart 1984 が挙げられる。

スブルクの改革者といった有力な改革者たちの思想よりも、ドイツ北西部ヴェストファーレン地方の中心地であったミュンスターで広がっていた再洗礼主義の影響を強く受けていた⁸。再洗礼派たちは、自らがキリスト教徒であるという自覚と信仰を持たない幼児への洗礼は聖書に基づいておらず無効であると見なし、信仰の自覚が生まれる成人になってから洗礼を行うべきだと見なし、1529年に開かれたシュパイヤー帝国議会では、幼児洗礼を拒否する者、成人洗礼を受ける者、行う者を死刑にするという決議がなされ、各地で再洗礼派に対する迫害が行われた¹⁰。

このように迫害されていた再洗礼派であったが、1534年2月にミュンスターで、再洗礼派が統治権を得て、市内で再洗礼主義に基づく宗教改革を行うことになった¹¹。彼らは、強い終末期待に基づき、市内で財産共有制、一夫多妻制、ダビデ王を頂く神政政治の導入など様々な制度改革を行い、都市を包囲する司教軍と約1年半の間戦った。しかし結局1535年6月にミュンスターは司教軍によって占領され、再洗礼派統治は幕を閉じた¹²。

再洗礼派が統治していた時期のミュンスターには、ドイツのヴェストファーレン地方や下ライン地方、オランダ、フリースラント、ブラバントといった低地地方など北西ヨーロッパ各地から大量の再洗礼派が流入してきた¹³。また、ミュンスターから各地に使者が派遣され、宣教が行われた。この宣教によって、下ライン地方にも再洗礼主義が広まった¹⁴。

⁸ 下ライン地方で広がっていた再洗礼主義の概要については、以下の研究を参照のこと。Rembert, Karl, Die „Wiedertäufer“ im Herzogtum Jülich. Studien zur Geschichte der Reformation, besonders am Niederrhein, Berlin 1899; Goeters, J. F. Gerhard, Die Rolle des Täuferturns in der Reformationgeschichte des Niederrheins: in: Rheinische Vierteljahresblätter 24, 1959, S. 217-236.

⁹ 再洗礼派に関する日本語の概説としては、以下のような研究が存在する。踊共二「宗教改革急進派—その起源と宗派化の諸相—」(森田安一編『ヨーロッパ宗教改革の連携と断絶』2009年、41-54頁); 出村彰『再洗礼派』日本基督教団出版局、1970年; 倉塚平『異端と殉教』筑摩書房、1972年。

¹⁰ Goertz, Hans-Jürgen, Die Täufer. Geschichte und Deutung, München 1980, S. 121f.

¹¹ ミュンスター再洗礼派に関しては以下を参照のこと。倉塚平「ミュンスターの宗教改革 — 再洗礼派千年王国への道 —」(中村賢二郎、倉塚平編『宗教改革と都市』刀水書房、1983年、260-316頁); 永本哲也「宗教改革期ミュンスターの社会運動 (1525-35年) と都市共同体 — 運動の社会構造分析を中心に —」(『西洋史研究』新輯第37号、2008年、86-117頁)。

¹² ミュンスター再洗礼派運動の概要に関しては以下を参照。Laubach, Ernst, Reformation und Täuferherrschaft, in: Jakobi, Franz-Josef (Hg.), Geschichte der Stadt Münster, Bd. 1., Münster 1993, S. 145-216; Klötzer, Ralf, Die Täuferherrschaft von Münster. Stadtreformation und Welterneuerung, Münster 1992.

¹³ Cornelius, C. A. (Hg.), Berichte der Augenzeugen über das münsterische Wiedertäuferreich. Die Geschichtsquellen des Bistums Münster, Bd. 2, Münster 1853, Neudruck 1965, S. 11; Detmer, Heinrich (Hg.), Hermanni a Kerssenbroch. Anabaptistici furoris Monasterium inclitam Westphaliae metropolim evertentis historia narratio, Zweite Hälfte. Die Geschichtsquellen des Bistums Münster 6. Band, Münster 1899, S. 509.

¹⁴ ミュンスター再洗礼派の宣教については。Rembert, S. 351-422.

従来再洗礼派は、「熱狂主義者」「宗教改革の左翼」「宗教改革急進派」等と呼ばれ、ルター派やツヴィングリ派、カルヴァン派等、世俗権力と結びつき体制化された諸宗派とは区別されて考えられてきた¹⁵。しかし、近年では、宗教改革は、単一の運動ではなく、より多様な動きを内包する複数形の運動であるという見方が広まっている¹⁶。そして、再洗礼派運動もまた、それら複数の宗教改革の中の一つであり、再洗礼主義もまた、宗教改革思想の一つのかたちであった。

また伝統的に、オランダや下ライン地方の歴史家の中には、この地域の初期宗教改革を考える際に、再洗礼派による活動を検討することが不可欠であると見なす者が存在している¹⁷。

再洗礼主義が宗教改革思想の一つであったということは、単なる歴史学の理論的言説ではなく、当時の現実を反映したものである。最も早い時期に成人洗礼が実行されたのは、スイスのチューリヒであったが、彼らは元々チューリヒの改革者ツヴィングリの支持者であった¹⁸。ミュンスターの再洗礼派も、元々ルター主義的な宗教改革を市内で導入しようとしていた人々であった¹⁹。下ライン地方でも、1520年代末から30年代はじめにかけてこの地域で活動していた説教師たちは、次々とミュンスターへ向かい、ミュンスターで再洗礼派の指導的説教師になっている²⁰。他方、1534年以前に下ライン地方各地で中心的な役割を果たしていた宗教改革支持者たちは、後に各地の再洗礼派の指導者になっている²¹。以上のように、ルター主義的、ツヴィングリ的宗教改革

¹⁵ 倉塚平「序説 ラディカル・リフォーメーション研究史」（倉塚平他編『宗教改革急進派』ヨルダン社、1972年、26-49頁）。

¹⁶ 例えばゲルツは、宗教改革運動を、一つの社会運動ではなく、多様な運動を含む社会運動であったと見なし、「宗教改革諸運動」と複数形で呼んだ。Goertz, Hans-Jürgen, *Pfaffenhaß und große Geschrei. Die reformatorischen Bewegungen in Deutschland 1517-1529*, München 1987, S. 244f. 宗教改革を単一の運動だと見なすか、多様性を含む運動と見なすかをめぐって、メラー、ヴェンデブル、ハムの間で論争が行われたが、後者二人は宗教改革の多様性を認めている。Wendebourg, Von Dorothea, *Die Einheit der Reformation als historisches Problem*, in: Berndt Hamm, Bernd Moeller und Dorothea Wendebourg, *Reformatiostheorien. Ein kirchenhistorischer Disput über Einheit und Vielfalt der Reformation*, Göttingen 1995, S. 31-51; Hamm, Berndt, *Einheit und Vielfalt der Reformation – oder: was die Reformation zur Reformation machte*, in: Hamm u. a., *Reformatiostheorien*, S. 57-127. また、スクリプナーやディクソンも、宗教改革の多様性を認めている。R. W. スクリプナー、C. スコット・ディクソン著、森田安一訳『ドイツ宗教改革（ヨーロッパ史入門）』岩波書店、2009年、59-70, 84-85頁。

¹⁷ de Hoop-Scheffer, J. G., *Geschichte der Reformation in den Niederlanden von ihrem Beginn bis zum Jahre 1531*, Leipzig 1886, S. 3; Rembert, S. 82.

¹⁸ 出村、17-32頁。

¹⁹ 永本、94-95頁。

²⁰ Cornelius, C. A., *Geschichte des Münsterischen Aufruhrs. Erstes Buch. Die Reformation*, Leipzig 1855, S. 336-350.

²¹ 例えば、ケルン再洗礼派共同体の創始者ゲルハルト・ヴェスターブルク Gerhard Westerburg やヴェーゼル再洗礼派の指導者ハインリヒ・クニッピンク Heinrich Knippinck、オットー・フィンク Otto Vinck は、再洗礼派になる前から、宗教改革支持者として活発に活動していた。Stiasny, Hans H., *Die Strafrechtliche*

と再洗礼主義的宗教改革には、明確な連続性があった。

宗教改革がまだ制度化されていないカトリックの領邦や都市においては、ルター主義もツヴィングリ主義も取り締まられるべき異端であり、その意味では再洗礼派と扱いが大きく異なるわけではなかった。例えば、ケルンの市当局は、再洗礼派を取り締まる際に、一貫して「ルター派」と呼び続けており、ルター派と再洗礼派の区別をしていなかった²²。

このように、1534年2月以降下ライン地方に広がった再洗礼派運動は、この地域における宗教改革運動であり、再洗礼主義は、宗教改革思想の一種であったと見なすことができる。

以上のように、1534年2月にミュンスター再洗礼派によって行われた宣教によって、再洗礼主義が下ライン地方でいかに伝播していったのかを、口頭でのコミュニケーションを含む全てのメディアを考慮に入れながら検証することを本稿の目的とする。

2. ヤコブ・フォン・オッセンブルクによる下ライン地方宣教

1532年2月にミュンスターで再洗礼派が都市を統治し始めてから、ミュンスターから「あらゆる土地」に使者が派遣された²³。しかし、再洗礼主義がこの時期に下ライン地方でいかに広まったかの詳細は、史料が少ないために不明である。そのような史料状況の中で、ヤコブ・フォン・オッセンブルクと彼と共にミュンスターへ向かった再洗礼派たちの審問記録は、再洗礼派自身によってこの時期の下ライン地方の宣教が語られる唯一の記録ということで極めて重要である²⁴。

ヤコブ・フォン・オッセンブルク Jacob von Ossenbrug は、再洗礼派統治が始まる前に、おそらく市内の親方のところで働くために²⁵、市外からミュンスターへ移住してきた蹄鉄鍛冶屋の職人であった²⁶。彼は、1534年1月5日にミュンスターで成人洗礼が始まった直後に、オランダか

Verfolgung der Täufer in der freien Reichsstadt Köln 1529 bis 1618, Münster 1962, S. 11-15; Kipp, Herbert, "Trachtet zuerst nach dem Reich Gottes" Landstädtische Reformation und Rats-Konfessionalisierung in Wesel (1520-1600), Kleve 2004, S. 332-357.

²² Stiasny, S. 17.

²³ 1534年3月4日にミュンスター司教に出されたクレーフエ公の顧問団の手紙による。Cornelius 1853, S. 225.

²⁴ Niesert, Joseph (Hg.), Münsterische Urkundensammlung, Bd. 1, Coesfeld 1826, S. 154-166; Cornelius 1853, S. 220-225.

²⁵ 審問記録によれば、彼はミュンスターである親方のところで働いていた。Niesert, S. 154.

²⁶ ヤコブの出身地については、意見が分かれている。研究者によって、ヴェストファーレン地方の司教都市オスナブリュック Osnabrück だと見なす者と下ライン地方の出身であると見なす者がいる。前者は、Cornelius 1853, S. 220. 後者は、Habets, Jos, De Wederdoopers te Maastricht. Tijdens de Regeering van Keizer Karel V, gevolgd door aantekeningen over de opkomst der hervorming te Susteren en omstreken, Roermond 1877, S. 211; Rembert, S. 372, A.4. ハベッツは、下ライン地方には Ossenbrug という家族名が多いことを、レンベルトは、一般にミュンスターの再洗礼派が、派遣先の場所を良く知る者やそこで生まれた者を使

ら来た使者から洗礼を受けている²⁷。その後、2月9日から10日かけてミュンスター市内で、再洗礼派は、ルター派・カトリック派と武装対峙するという状況に陥った。再洗礼派は数的に劣勢であったが、ミュンスター司教による都市の占領と伝統的な特権の剥奪を恐れた市長たちが、最終的に再洗礼派と和解し、市内での信仰自由が認められたため、再洗礼派は虐殺を免れた²⁸。司教との戦争を恐れ多くの市民が逃亡した結果、2月23日に再洗礼派が市参事会議員選挙で勝利し、都市の統治権を得ることとなった。ヤコブは、2月9日から10日にかけての騒擾を自ら経験した後、おそらく市参事会選挙が行われる前に、ミュンスターの指導的説教師の一人ヨハン・クロプリス Johan Kloppris によって下ライン地方に派遣された²⁹。

ヤコブは、下ライン地方各地で宣教を行い、彼と同じくクロプリスによってミュンスターからヴァッセンベルクに派遣されていた使者ペーター・フォン・ドレメン Peter von Dremmen、そして36名の同調者と共に、ドレメン Dremmen を出発しミュンスターを目指した³⁰。しかし、彼らはノイス Neuss から船でデュッセルドルフ Düsseldorf へ向かおうとしたところを、2月28日

者として派遣する傾向があったことを、ヤコブが下ライン地方あるいはユーリヒ公領出身であると判断する根拠として挙げている。次章で見るように、ヤコブは下ライン地方の数多くの場所を周り、各地の支持者に対する宣教を行っているため、下ライン地方の地理や住民について精通していた可能性は高い。以上のことを考えると、ヤコブの出身地は下ライン地方であると考えるのが妥当であるようにも思えるが、これは推測に止まる。

²⁷ 審問記録で彼は、公現祭（1月6日）にライデンの預言者から洗礼を受けたと述べている。Cornelius 1853, S. 221f. しかし、ライデン出身の預言者ヤン・ファン・ライデンが、ミュンスターに到着したのは1月13日であった。Klötzer, Ralf, Die Verhöre der Täuferführer von Münster vom 25. Juli 1535 auf Haus Dülmen. Edition der Protokolle sowie der vorbereitenden Fragenliste, in: Westfälische Zeitschrift 155, 2005, S. 64. また、1月5日にミュンスターで成人洗礼を始めた二人の使徒バルトロメウス・ブックビンダー Bartholomeus Boekbinder とウィレム・デ・カイパー Wilem de Kuiper は、それぞれブラバントのスヘルトールヘンボス's Hertogenbosch とフースデン Huesden 出身であり、ライデン出身ではない。Mellink, A. F., De Wederopopers in de noordelijke Nederlanden 1531-1544, Groningen 1953, S. 22. 以上のことを考えると、ヤコブの審問記録での証言は、彼が洗礼を受けた日にちか預言者の出身地のどちらかを間違えていることになる。彼の証言を整合的に理解することは不可能であるが、いずれにせよ、彼がミュンスターで成人洗礼が導入されてから程なくして、洗礼を受けたことは確かであろう。

²⁸ 倉塚平「ミュンスター千年王国前史(8)」(『政経論叢』明治大学政治経済研究所紀要 54 巻 1/2/3 号、1986 年、79-93 頁)；永本哲也「ミュンスター宗教改革運動における市参事会の教会政策 — 1525-34 年市内外諸勢力との交渉分析を通じて —」(『歴史学研究』876、2011 年 2 月号、29-31 頁)。

²⁹ ヤコブは、すでに 2 月 28 日に下ライン地方で逮捕されているため、活動期間を考えれば、2 月 23 日以前にすでにミュンスターを離れていたことは確実である。Cornelius 1853, S. 220.

³⁰ 3 月 3 日にクレーフエ公からミュンスター司教に宛てられた手紙では、逮捕者の数が 38 人と記載されている。そのため、ミュンスターからの使者二人以外の人々の数は、36 人になる。FML518/519, Bd. 3a. Nr. 44 (Landesarchiv Nordrhein-Westfalen Abteilung Westfalen); Sonder- Verzeichniss zum Münst. Landes- Archiv Nr 518/519 BdI Anabaptistica 1525 April - 1535 März, S. 136.

にクレーフエ公の役人によって逮捕された³¹。

この時作成されたヤコブとその同行者たちの審問記録には、彼が宣教した場所や出会った人々の名前、各地で行った行為に関する証言が収められている。この時期の下ライン地方の宣教では、印刷物ではなく、主に口頭でのコミュニケーションが用いられていた。口頭でのコミュニケーションによる伝播は、文字によって記録されにくいのでわかりにくい、この審問記録を使うことで、下ライン地方で再洗礼主義がいかに伝播したかを詳しく知ることができる。

そのため、本稿では、ヤコブたちの審問記録を用いて、ミュンスター再洗礼派による統治が始まった直後の1534年2月に下ライン地方で再洗礼主義が、口頭でのコミュニケーションによる宣教を通じて、いかに伝播していったかについて分析を行う。

3. ヤコブ・フォン・オッセンブルクの宣教の目的、移動経路とその活動

3.1. ヤコブの宣教の目的

ヤコブ・フォン・オッセンブルクは、1534年2月後半に、説教師ヨハン・クロプリスによってミュンスターから下ライン地方に派遣された。出発の際ヤコブは、クロプリスから旅費を受け取っている³²。派遣の目的は、彼の証言によれば、以下のことを告げるためであった。世界は復活祭までに残酷に罰され、10人に1人しか生き残らないであろう。その時平和で安全なのは、新しきエルサレムであるミュンスターのみである。そこでは主が人々を守るはずである。ミュンスターにきたキリスト教徒は、家や食べ物、お金、衣服を保証される。彼は、説教師たちから聞いたこの話を、各地で人々に告げた³³。

さらに彼は、ミュンスターで起こった奇跡を人々に告げた。彼は、審問記録で、彼がミュンスターを離れたのは、以下のような奇跡的な出来事を見たからだと述べている。一つ目は2月8日に再洗礼派の間で生じた連鎖的な予言である³⁴。彼によれば、ミュンスター再洗礼派の指導者クニッパードルリンク、そしてツィンマンナーメンシェ Zymmermänsche という女性、さらには他の多く者たちが、霊に突き動かされ、「悔い改めよ。悔い改めよ。何故なら、シオンの王がやって来て、エルサレムを再興するであろうから。」と人々に呼びかけた³⁵。

³¹ Cornelius 1853, S. 220, 225.

³² Niesert, S. 156. ヤコブが受け取った金額は、1 hornsgulden である。

³³ Niesert, S. 157f.

³⁴ 史料での記述に関しては、Niesert, S. 154f; Detmer 1899, S. 484ff; Klötzer 2005, S. 65. を、研究者による記述に関しては、Kirchhoff, Karl-Heinz., Die Endzeiterwartung der Täufergemeinde zu Münster 1534/35. Gemeindebildung unter dem Eindruck biblischer Verheißungen, in: Jahrbuch für Westfälische Kirchengeschichte 78, 1985, S.29f; 倉塚 1986, 80-84 頁 を参照。

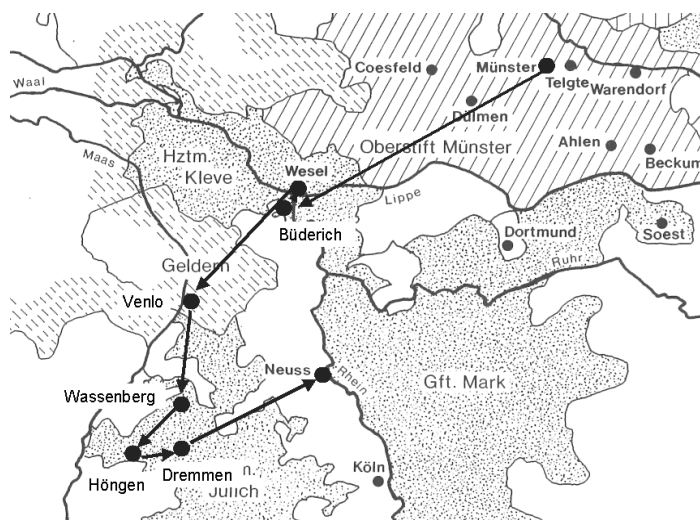
³⁵ Niesert, S. 154f.

二つ目は、2月9日から続いた市内での武装対立がルター派と再洗礼派の和解に終わり、再洗礼派が虐殺の恐怖から解放された時に起こったとされる奇跡である。彼によれば、この日ミュンスターが青と黒の炎に包まれ、その炎のために太陽が非常に明るく輝いた。その光にマルクトに立っていた再洗礼派の顔が照らされ、金色に染められたかのようになり、彼らは倒れ込み、予言を行った。さらに、その後その炎の上に馬に乗った男が現れた³⁶。再洗礼派が集まっていたマルクト広場には、天に炎、煙、血という奇跡のしるしが現れたが、これは神が彼の民を奇跡的に救った証であった³⁷。

彼の証言によれば、ヤコブが下ライン地方各地で、ミュンスターで起こった奇跡について告げただために、人々は彼に従った³⁸。このように、ヤコブの目的は、ミュンスターで起こった奇跡を述べ伝え、人々をミュンスターへ移住させることであった。

3.2. ヤコブの移動経路と各地での活動

ヤコブの審問記録によれば、彼の移動経路と、各地での活動は、以下のようなものであった。



Laubach, Ernst, Reformation und Täuferherrschaft, in: Jakobi, Franz-Josef (Hg.),
Geschichte der Stadt Münster, Bd. 1., Münster 1993, S. 152. を加工。

ミュンスターから出発したヤコブは、ヴェーゼル Wesel 近郊にあるブューデリッヒ Büderich で、門の脇に住む靴屋に、クロプリスから預かった手紙を渡した³⁹。ここから、ミュンスターにい

³⁶ Niesert, S. 155f.

³⁷ Niesert, S. 165.

³⁸ Niesert, S. 157f.

³⁹ Cornelius 1853, S. 220.

る説教師であるクロプリスは、下ライン地方の再洗礼主義の支持者を個人的に知っており、これ以前から手紙のやりとりをしていたと推測できる。

ヤコブはその後ヴェーゼルに赴くと、13 歳になるクロプリスの娘アンナ Anna に、父からの手紙を渡した。その手紙は、アンナにミュンスターへ来るよう促すものであったが、アンナは行くつもりだと答えた⁴⁰。

彼はヴェーゼルで、“白鳥亭 swanen”という宿屋に泊まった。彼はその宿屋で、見知らぬ、あるいは名前を知らない多くの仲間の前で、前述のミュンスターで起こった奇跡について語った。彼は、そこでエメリッヒ Emmerich の市民だという書記に会った。ヤコブは彼の名前を知らなかったと述べている⁴¹。

以上のように、ヤコブは、ヴェーゼルの再洗礼主義の支持者たちを個人的に知らなかった。そのため、ヤコブがヴェーゼルの支持者を訪れるのは、これが初めてだったはずである。にもかかわらず、彼は、支持者が集う宿屋がどこなのか、そして支持者たちを見分ける方法を知っていた。そのため彼は、ミュンスターあるいは旅の道中で、ヴェーゼルの支持者が集まる場所や彼らを見分ける方法を知る機会があったと思われる。また、ヴェーゼルの宿屋に集まっていた支持者たちの中にはライン河畔の都市エメリッヒの市民が含まれていたことを考えると、ヴェーゼルには市外から来た支持者たちが集まっていた可能性も考えられる。

ヤコブはその後、ヴェーゼルからヘルダーラント Gelre へ向かった。彼はそこで一晩過ごす、ミュンスターの出来事について話さなかった⁴²。ここから、ヤコブは滞在した全ての場所で、宣教を行っていたわけではないことが分かる。

次に彼はフェンロー Venlo へ向かった。彼はそこで、レンハルト Lenhart という名の男のところに滞在した。ヤコブはフェンローで、レンハルトとヨハン・ブラハト Johan Bracht という男に、ゴットフリート・シュトラエーレン Gottfried Straelen の手紙を渡した⁴³。シュトラエーレンは、ヘルダーラント出身で、1532 年夏以降ミュンスターの宗教改革・再洗礼派運動で説教師を勤めていた⁴⁴。ここから、クロプリスだけでなく、シュトラエーレンも、ミュンスター市外の再洗礼主義支持者を個人的に知っており、手紙のやりとりを行っていたと思われる。ヤコブが、ミュンスターの出来事について語ると、二人はミュンスターへ赴き、それについて知りたいと述べた⁴⁵。

その後ヤコブは、フェンローからブラニゲン Braniggen を通って、ヴァッセンベルク Wassenberg へ赴いた。そこで彼は、あちこちに歩いて訪れた。彼は、ヴァッセンベルクの代官

⁴⁰ Niesert, S. 156; Kipp, S. 174, S. 611.

⁴¹ Cornelius 1853, S. 220f.

⁴² Cornelius 1853, S. 221.

⁴³ Cornelius 1853, S. 221

⁴⁴ Rembert, S. 141; Cornelius, C. A., Geschichte des Münsterischen Aufruhr. Zweites Buch. Die Wiedertaufe, Leipzig 1860, S. 337.

⁴⁵ Cornelius 1853, S. 221.

Droste にも、クロプリスの手紙を渡した。その代官は、その手紙の内容を大変気に入ったと、ヤコブに返答した。代官のところには、もう一人クロプリスによって代官の下へ派遣された使者ペーター・フォン・ドレメンが滞在していた。ヤコブの証言によれば、彼はペーターを知らなかった⁴⁶。彼は、若い靴職人であった⁴⁷。彼は、ヴァッセンベルクでは仲間を得られなかったが、フッケルホーフェン Hückelhofen に仲間がいると述べた⁴⁸。

ヴァッセンベルクは、1529 から 32 年にかけて、ヨハン・クロプリス、ハインリヒ・ロール Heinrich Roll という宗教改革派の説教師が司牧していた都市である⁴⁹。クロプリスは 1533 年 2 月、ロールは 1532 年前半にミュンスターへ赴き、市内の宗教改革、再洗礼派運動で指導的説教師という役割を勤めていた⁵⁰。クロプリスが、当地の代官に使者を派遣し、さらに手紙を送ったことから、両者の間には 1534 年 2 月以前からやりとりがあったことが分かる。

しかし、ロールとクロプリスが以前宗教改革思想を広めていたという土壌があり、代官の協力を得られるという他の場所よりも恵まれた政治的環境にあるにもかかわらず、ヴァッセンベルクで、ペーターは、再洗礼主義の支持者を獲得することはできなかった。このことから、宣教をするために有利な条件がそろった場所でも、必ず信徒を獲得できるわけではないことが分かる。

ヤコブはその後、ヴァッセンベルクからヘンゲン Höngen へ向かった。彼はそこでハインリヒ・スラハトスカープ Heinrich Slachtscaep に、ミュンスターの出来事を語った⁵¹。彼は、1530 年代に入ってからフッケルホーフェン、アーヘン、マーストリヒト、そしてヘンゲンなど下ライン地方一帯で活動していた宗教改革派の説教師である⁵²。彼は、クロプリスと幼児洗礼について議論したことがあった⁵³。彼はこの後ヴェストファーレン地方の都市コースフェルト Coesfeld に赴き、3 月にミュンスターの指導的神学者ベルンハルト・ロートマンから手紙を受け取った。そして、ミュンスターに赴き、説教師としての役割を勤めた⁵⁴。このことから、スラハトスカー

⁴⁶ Cornelius 1853, S. 221.

⁴⁷ Cornelius 1853, S. 221f.

⁴⁸ Cornelius 1853, S. 221.

⁴⁹ クロプリスが助任司祭としてヴァッセンベルクで司牧していたのは、1529 年末から 32 年末である。Cornelius 1860, S. 344. ロールが説教師として司牧していたのは、1531 年末から 1532 年前半までである。Rembert, S. 321f.

⁵⁰ クロプリスがミュンスターに来たのは、ミュンスター司教とミュンスター市の間で和約が締結された 1533 年 2 月である。Niesert, S. 131. ロールは、1532 年 8 月 10 日に説教師に任命されたので、ミュンスターに来たのはそれ以前である。Stupperich, Robert (Hg.), Die Schriften der Münsterischen Täufer und ihrer Gegner. 3. Teil. Schriften von evangelischer Seite gegen die Täufer, Münster 1983, S. 227.

⁵¹ Cornelius 1853, S. 221.

⁵² Rembert, S. 305ff.

⁵³ Niesert, S. 110.

⁵⁴ Stupperich, Robert (Hg.), Die Schriften der Münsterischen Täufer und ihrer Gegner. 1. Teil. Die Schriften Bernhard Rothmanns, Münster 1970, S. 51.

フは、おそらくミュンスターに赴いたクロプリスたち下ライン地方出身の説教師と、1534年2月以前から継続的に連絡を取り続けていたと思われる。

ヤコブはヘーゲンで、もう一人ライトゲン・ニーセン Leitgen Niesen にミュンスターの出来事を語った。しかし、彼はこれを行いたくないし、彼を泊めたくないと言った⁵⁵。彼は、1533年に当時ミュンスターにいた説教師ハインリヒ・ロルの手紙を持っていたため、彼の支持者であったと思われる⁵⁶。ヤコブがライトゲンの下を訪れたことを考えると、彼は引き続きロルと連絡を取り合っていた可能性もある。しかし、その彼がミュンスター行き、そしてミュンスターからの使者への援助を拒否したことは、かつてのロルの支持者の全てが、ミュンスター再洗礼派を支持していたわけではないことを示している。

ヤコブは、次にヘーゲンからドレメンへ向かい、そこで二晩ペーターの家に泊まった。そこに再洗礼派たちが集まった⁵⁷。

また、ヤコブは証言で、彼とペーター以外に、二人の若い商人が、オーデンキルヘン Odenkirchen とマーストリヒト Tricht へ派遣され、そこでミュンスターの出来事を語ったと述べた⁵⁸。ヤコブも、オーデンキルヘンに一晚泊まった⁵⁹。

ヤコブやペーターは、36人の支持者たちと共にドレメンからミュンスターに向かった。ヤコブによれば、支持者たちにはまだ成人洗礼を受けた者はいなかった⁶⁰。そして、一行は2月28日にノイスで逮捕され、ミュンスターにたどり着くことなく、その旅を終えた。

4. 下ライン地方における宣教と再洗礼主義の伝播

以上のようなヤコブの宣教から、いくつかの特徴を読み取ることができる。

4.1. 宣教地の選定基準

まず、宣教場所の選定は、多くの場合ミュンスターで既に行なわれていたことが明らかになった。ヤコブは、宣教中ブューデリッヒ、ヴェーゼル、フェンロー、ヴァッセンベルクで、ミュンスターにいる説教師クロプリスとシュトラエーレンの手紙を、当地の支持者に渡している。そのため、ヤコブがミュンスターを出発する前に、この二人の説教師の指示で、これらの都市を訪れることは決まっていたことになる。

⁵⁵ Cornelius 1853, S. 221.

⁵⁶ Cornelius 1855, S. 225; Rembert, S. 359.

⁵⁷ Cornelius 1853, S. 221.

⁵⁸ Cornelius 1853, S. 221.

⁵⁹ Cornelius 1853, S. 221.

⁶⁰ Cornelius 1853, S. 222.

ヤコブは、他の宣教地であるヘーゲンとドレメン、オーデンキルヒェンでは、預かった手紙を渡したと証言していない。しかし、ヘーゲンでは、スラハトスカーフとニーセンという二人に会っている。そのため、ヤコブは、ヘーゲンに行く前に既に彼らの事を知っており、彼らに会うためにヘーゲンに赴いた可能性が高い。また、ドレメンに赴いたのは、そこがもう一人の使者ペーター・フォン・ドレメンの故郷で、彼からドレメンには数多く支持者がいることを聞いていたからであろう。ヤコブはペーターと共にドレメンに赴き、彼の家に泊まっていた。オーデンキルヒェンに赴いた理由は不明である。しかし、オーデンキルヒェンには別の使者が派遣されていたので、おそらくミュンスターの説教師はオーデンキルヒェンに支持者がいることを知っていた。その情報が、説教師から直接、あるいはその使者からヤコブにも伝わっていたため、ヤコブも当地へ赴いたのである。

以上の様に、ヤコブが宣教を行った全ての場所は、ミュンスター、あるいは宣教の過程で、支持者がいると事前に判明していた場所であった。

また、ヤコブの証言で宣教地として最初に上がる地名は、下ライン地方のブューデリヒであり、ミュンスターとブューデリヒの間の地域で彼が宣教を行ったことは確認ができない。これが、宣教を行ったが証言では話題に上がらなかっただけなのか、それとも宣教を行わなかったため証言で話題に上がらなかったのかを確かめる術はない。しかし、この時期に限らず、ミュンスターと下ライン地方をつなぐ地域では、ミュンスターからの使者による宣教や再洗礼派の姿はほとんど見られず、宣教や再洗礼派に関する記録が集中している下ライン地方とは対照的である。そのため、ヤコブの証言でミュンスターと下ライン地方の間の地域に関する宣教が語られていないのは、実際に宣教が行われなかったためである可能性が高い。

ここから、既に支持者が存在していることが分かっている場所に使者を派遣し、彼らに向けて宣教を行うというミュンスター再洗礼派の宣教方針が明らかになる。この宣教方針は、ヤコブが滞在していた全ての場所で宣教をしたのではなく、ヘルダーラントのように、彼があえて宣教を行わなかった場所が存在することによって裏付けられる。このことは、ミュンスターの再洗礼派は、宣教が成功するかどうか不明な場所では宣教行わず、宣教に応じてミュンスターへ来る可能性が高い、それ以前からの支持者を対象に宣教を行っていたことを示していると解釈できる。

4.2. 下ライン地方とミュンスターの関係

ミュンスター再洗礼派がこのような宣教方針を取るためには、彼らが宣教地を決める前に、下ライン地方のどこに支持者がいるかを知っていることが必要であった。ヤコブの証言から浮かび上がったのは、ミュンスター再洗礼派の情報源が当時主に三つあったことである。

一つ目は、下ライン地方の支持者から届いた手紙である。ミュンスターの説教師クロプリスはブューデリヒの靴屋と自らの娘、ヴァッセンベルクの代官に、シュトラエーレンはフェンローの二人の支持者に手紙を書いていた。見知らぬ者に手紙を出すことは少ないので、二人の説教師は、

手紙の受取人とそれ以前から手紙のやりとりをしていた可能性が高い。また、ヘーンゲンのライトゲンも、ミュンスターの説教師ロールとの間に手紙のやりとりをしていた可能性がある。このように、ミュンスターの説教師たちと下ライン地方の支持者たちは、以前から手紙のやりとりをしており、彼らの手紙を通じて、ミュンスターには下ライン地方の宣教状況や支持者の名前が伝えられていたと思われる。

二つ目は、手紙を運ぶ使者である。ヤコブは、クロプリスとシュトラエーレンの手紙を、下ライン地方各地の支持者に届けていたが、ミュンスターの説教師と下ライン地方の支持者たちの間の手紙のやりとりは、ヤコブのような使者を通じて行われていたと思われる。再洗礼派はあらゆる場所で世俗権力による逮捕の対象になっているため、手紙を運ぶ役目は、手紙の送り手に信頼されている、再洗礼主義の支持者にしか任せられなかったはずである。そのため、下ライン地方からミュンスターへ手紙が送られる場合も、ヤコブのような元々ミュンスターから派遣された使者か下ライン地方にいる再洗礼主義の支持者が、手紙を届ける使者の役割を果たしたと思われる。ヤコブも、各地で宣教する中で、新たな支持者たちと出会い、話をして、各地の状況に関する知見を深めていた。ヤコブは逮捕され、ミュンスターにたどり着けなかったが、ミュンスターに無事帰還した使者たちは、下ライン地方で実際に見聞きしてきた様々な情報を、口頭でミュンスター再洗礼派の指導者たちに伝えていたはずである。そのため、手紙に書かれた限定された情報以外の、より幅広い情報が、手紙を持ってきた使者によって、ミュンスターにもたらされていたと思われる。

三つ目は、下ライン地方からミュンスターに移住した支持者たちである。ヤコブは、ドレメン出身の8～9人が、彼が出発する前に既にミュンスターに移住していたと証言している⁶¹。ここから、すでにヤコブがミュンスターを出発した2月後半までに、下ライン地方から再洗礼主義の支持者が移住し始めていたことが分かる。このような移住者もまた、下ライン地方の支持者に関する様々な情報を、ミュンスターにもたらしたはずである。

以上のように、様々な情報源から下ライン地方の支持者の居場所や名前を得られたために、ミュンスターの説教師たちは、確実に支持者がいる場所へと使者を派遣することが可能になったのだと思われる。

説教師たちが、下ライン地方の支持者に手紙を送っていたこと、2月11日にミュンスターで再洗礼派が信仰自由を認められた直後に、ドレメンの支持者たちがミュンスターに移住をしてきたことから、その前からミュンスター再洗礼派と下ライン地方の支持者の間には継続的にやりとりがあった可能性が高い。また、ドレメンの支持者がミュンスターにきた時期の早さから、そのようなやりとりによって、下ライン地方の情報がミュンスターにもたらされただけでなく、ミュンスターの情報もすぐに下ライン地方に伝えられたことが分かる。

下ライン地方には、ヴェストファーレン地方と比べて、再洗礼主義の支持者がいる場所が多く、

⁶¹ Cornelius 1853, S. 220.

手紙や使者を通じたやりとりも活発だったように見える。既に見たように、このことが下ライン地方で集中的に宣教が行われた理由であると思われるが、下ライン地方でこれほど支持者が多かったのは、ミュンスターの説教師たちの多くが、下ライン地方で宗教改革を広めたという下地があったためだと思われる。

ミュンスターで再洗礼主義を広める際に中心的な役割を果たした説教師の多くは、ミュンスターに来る前は、下ライン地方で活動を行っていた者たちであった。ヨハン・クロプリスとハインリヒ・ロールは、ヴァッセンベルクで⁶²、ディオニシウス・フィンネ Dionisius Vinne は、ヘーゲンとその近隣に位置するハーフェルト Havert、スステルン Süstern で⁶³、ヘルマン・シュタブラーデはヴェーゼルの南に位置するメールスで司牧を行っていた⁶⁴。シュトラエーレンは、ヘルダーラント出身であった⁶⁵。このように彼らが活動していた地域や出身地は、ヤコブが宣教を行った地域と重なっている。

彼らは、1532 年から 33 年にかけて、下ライン地方からミュンスターに移住し、ミュンスターで説教師になったが、彼らが活動していた場所の支持者との関係が切れたわけではなかった。

1533 年に、彼らが、スステルンの信徒に向けて著作・手紙を送っていたことが確認できる。一つは、聖餐と洗礼に関する著作で、「スステルンのキリスト教共同体」に宛てられたものであった⁶⁶。この著作の著者は不明であるが、レンベルトは、当時ユーリヒ公領にいた説教師たちが、共同で書いたのではないかと推測している⁶⁷。この著作は、封筒に綴じ込まれ、持ち運ばれていた。この封筒は使い込まれた跡があるため、この著作は、支持者の間で頻繁に回覧されていたことが分かる⁶⁸。二つ目は、「スステルンやマーストリヒトまでの周辺にいる我が愛する兄弟姉妹と全ての敬虔なキリスト教徒たち」に宛てられた手紙である⁶⁹。この手紙の送り主も不明であるが、ロールであると目されている⁷⁰。このように、ミュンスターへ赴いた説教師たちは、彼らが以前活動していた下ライン地方の支持者に向けて著作や手紙を書いており、それらは支持者の間で回覧されていた。

1534 年 2 月にも、説教師たちは下ライン地方の支持者に手紙を送っていたことを考えると、説教師たちと下ライン地方の支持者たちの間には、彼らがミュンスターへ移住した後も、継続的に手紙のやり取りがあった可能性が高い。そして、説教師たちが、手紙を通じて下ライン地方の

⁶² 註49を参照。

⁶³ Cornelius 1860, S. 343.

⁶⁴ Niesert, S. 129; Cornelius 1860, S. 345.

⁶⁵ Rembert, S. 141.

⁶⁶ Rembert, S. 355.

⁶⁷ Rembert, S. 356.

⁶⁸ Rembert, S. 355.

⁶⁹ Rembert, S. 356.

⁷⁰ Rembert, S. 358f.

支持者たちに再洗礼主義を伝えていたために、下ライン地方には、ミュンスターで再洗礼派が公認される前から、既に再洗礼主義を支持する者たちがいたのだと思われる。そして、説教師たちは、このような宣教状況を手紙や使者によって知っていたため、彼らに向けて宣教を行うべく、手紙と使者を派遣したのだと考えられる。

以上のように、ミュンスターに近いヴェストファーレン地方よりも、下ライン地方で盛んに宣教が行われたのは、説教師たちがかつて活動し、支持者を獲得していたという、有利な初期条件があったからであると結論づけられる。

4.3. 宣教で用いられたメディアとその影響力

ヤコブが宣教をする際に用いた手段は、基本的に口頭での説得であった。彼は各地で再洗礼主義の支持者に会っては、間近に迫った神の罰とミュンスターで起こった奇跡について物語り、神の罰を免れるためミュンスターへ来るよう促した。ヤコブとペーター・フォン・ドレメンの宣教に応じてミュンスターへ赴くことを決意した者は36人いたが、これが彼らの宣教の成果であった。

ヤコブは証言で、彼がミュンスターで起こった奇跡を告げたことで、人々は彼に従ったと述べていたため⁷¹、ヤコブの証言を信用するならば、この36人は、ヤコブあるいはペーターによる口頭での宣教を受けて、故郷を捨てミュンスター移住を決意したと考えることができる。

ヤコブの宣教で用いられたもう一つの手段が、ミュンスターの説教師から預かった手紙を、手渡しすることであった。しかし、これらの手紙が、彼らにミュンスターへの移住を決意させたことは史料によって確認できない。クロプリスの手紙を受け取った彼の娘アンナは、ヤコブの証言によれば、父の勧めに従いミュンスターへ移住すると述べていたが⁷²、ヤコブと共にミュンスターへ向かう途中に逮捕された集団の中に、彼女の名前を見つけることはできない⁷³。また、ヤコブの審問記録に記載されている逮捕者リストには、ヴェーゼル出身者がいないため、クロプリスの手紙を受け取った靴屋はおそらく一行に含まれていなかった。同様のことは、シュトラエーレンの手紙を受け取り、ミュンスターに赴き、ミュンスターの奇跡について知りたいと述べたフェンローの二人の男性にも当てはまる。以上のように、説教師たちの手紙が、ミュンスターへの移住を促したとは確認ができない。

ヤコブがミュンスターを出発する前にドレメンから、ミュンスターへ移住した者たちは、ミュ

⁷¹ Niesert, S. 157f.

⁷² Niesert, S. 156.

⁷³ Cornelius 1853, S. 222. ヤコブの審問記録には、彼と共に逮捕された者の名前リストが含まれている。しかし、ここで名前が挙がっているのは、36人中27人のみである。ここにアンナの名前がないからと言って、彼女が逮捕されていないとは限らないが、逮捕されていなかった可能性の方が高い。

ンスターから送られた手紙を受け取り、それにより移住を決意した可能性がある。しかし、手紙はミュンスターからの使者を通じて運ばれていたため、彼らは、手紙を受け取る際に、使者からの宣教を受けているはずである。そのため、手紙単独で移住を決意したとは考えられない。

前節で見た様に、下ライン地方の宗教改革思想の伝播において手紙は、1532 年以降下ライン地方からミュンスターへ移住した説教師と下ライン地方の支持者の関係を保ち、お互いの土地の情報を伝え合い、ミュンスターからは sacrament に関する教えや、おそらくは再洗礼主義を下ライン地方の支持者たちに伝えるという機能を果たしていた。そのため、現在のところ史料で確認できる限りでは、手紙は、読んだ者をすぐにミュンスター移住という行動へ動かすというよりも、継続的なやり取りによって再洗礼主義が伝播する下地を作るという役割を、下ライン地方での宣教で果たしていたと見なすことができる。

ヤコブの証言から宣教で用いられたと確認できるメディアは、口頭での宣教と手紙という二つのみであり、宗教改革研究で宗教改革思想の伝播に重要な役割を果たしたと言われてきた印刷物が、この時期の下ライン地方の宣教に用いられたことは確認できない。

以上の検討から、ヤコブ及びペーターが下ライン地方で行った宣教で主に用いられ、実際に人々をミュンスター移住へと決断させたメディアは、使者が直接口頭で行った説得であったと結論づけられる。

5. おわりに

1534 年 2 月に下ライン地方で行われたミュンスター再洗礼派の宣教から、再洗礼主義が以下のように伝播したことが明らかになった。

先ず、下ライン地方とミュンスターの間には、ミュンスター再洗礼派が 1534 年 2 月に市内で公認される以前から、手紙や使者を通じたやり取りがあった。それは、ミュンスター再洗礼派の説教師たちの多くが、ミュンスターに移住する前に下ライン地方で活動しており、当地の信徒とのやり取りを続けていたためであった。そのため、ミュンスターの状況や再洗礼主義は、早い段階で下ライン地方に伝わっており、即座にドレメンからミュンスターへの移住を決断する支持者もいた。

このようなやり取りによって、下ライン地方各地には再洗礼主義の支持者が生まれ、彼らに関する情報は、ミュンスターへ伝えられていた。そして、ミュンスターの説教師たちは、支持者が既にいる場所に向けて、ヤコブやペーターのような使者を、宣教のために派遣した。逆に言えば、彼らは支持者がいない場所では、宣教を行わなかった。彼らは、宣教に応じるかどうか分からない不特定多数の者たちへ宣教するよりも、応じる可能性が高い既存の支持者たちに対して宣教を行うという方針を取っていたと思われる。そして、使者たちは説教師から預かった手紙を各地の支持者に渡ししながら、下ライン地方各地で支持者たちと知り合い、さらなる場所で宣教を進めていった。

この時期の宣教で最も効果的であったのが、使者による口頭での説得であった。使者たちは、各地の支持者に、ミュンスターで起こった奇跡について語り、そして神の罰が間近であり、それを免れられるのは新しきエルサレムであるミュンスターだけであり、すぐにミュンスターへ移住するよう呼びかけた。話を聞いた支持者の全員が彼に従ったわけではなかったが、36名が使者の言葉に動かされ、使者と共にミュンスターへ移住することを決意したのであった。

このように、この時期の下ライン地方の宣教は、印刷物ではなく、手紙と口頭での説得によって行われ、より効果的であったのは、口頭での説得であった。この結果は、宗教改革思想の伝播において、印刷物だけでなく、口頭でのコミュニケーションが果たした役割の重要性を認める必要があることを示している。そのため、今後の宗教改革研究において、本稿で行ったような、全てのメディアを考慮に入れた宗教改革思想の伝播に関する実証研究を、他の時代や地域でも地道に積み重ねていくことが必要となるであろう。

〔付記〕本研究は、平成21年度東北大学大学院 GP 院生プロジェクト歴史資源個別分析プロジェクト事業、東北開発記念財団：平成22年度（後期）海外派遣援助による研究成果の一部である。